



“往来”と“all right”

—都市と農山漁村の共生・対流表彰事業—

第
16
回

オーライ!ニッポン大賞



主催：オーライ!ニッポン会議（都市と農山漁村の共生・対流推進会議）

協賛：一般財団法人都市農山漁村交流活性化機構

後援：総務省、文部科学省、厚生労働省、農林水産省、経済産業省、国土交通省、環境省、
一般社団法人日本経済団体連合会、全国知事会、全国市長会、全国町村会

「オーライ!ニッポン」とは

都市と農山漁村の間の“人・もの・情報”の往来（おうらい）を盛んにすることで、日本全国が元気（All right）になることをめざす国民運動「都市と農山漁村の共生・対流」のキャンペーンネームです

第16回オーライ！ニッポン大賞 講評

都市と農山漁村の共生・対流に関する優れた取り組みを表彰するオーライ！ニッポン大賞は、第16回を迎えることができました。これもひとえに現場で活動されている皆様のご尽力と、関係7省をはじめ、関連団体及び地方自治体等関係者の皆様の温かいご理解とご支援の賜物であり、この場をお借りして心より敬意と感謝を申し上げます。

都市と農山漁村の共生・対流とは、都市と農山漁村を相互に行き交うライフスタイルを広め、都市と農山漁村の双方が元気を取り戻すことをめざす国民運動です。日本全体が活力ある社会を継続するためには、その役割はますます重要となっています。

さて、今年度は全国からオーライ！ニッポン大賞79件、ライフスタイル賞15件、合計94件のご応募を頂きました。募集の周知にご協力いただいた関係者の皆様に改めて御礼申し上げます。

今年度の応募内容を拝見したところ、農山漁村の人手不足や祭りの担い手不足の課題に対して、都市から農山漁村へ交流するための人を送り込む活動、自然の驚異、減災を学ぶガイドの活動、伝統的な食・方言という地域資源の活用による交流事業、未来を担う子どもを農山漁村に受け入れ教育を中心とした交流事業、廃校を都市との交流施設として再生した取り組み、住民の住民による住民のための森づくりを行政と協働との活動と、どの活動も生き生きと交流事業に取り組んでおり、明るい未来を感じることができました。

都市部からの移住や都市と農山漁村を行き来する二地域居住等、個性的で魅力的なライフスタイルを実践し共生・対流のモデルとなる個人を表彰するライフスタイル賞では、自分の理想とするライフスタイルを実現する場所として、農山漁村に移住し新たなアイデアを実現しようとする活動が、過疎化少子高齢化などの課題を抱える農山漁村に光明を与えるものと期待されます。

取り組みのテーマや手法は個々に異なりますが、都市生活者の都市と農山漁村のオーライ（往来）として、田舎暮らしのモデルとして、参考となるものと思います。

審査委員会における選考の結果、オーライ！ニッポン大賞グランプリ（内閣総理大臣賞）1件、オーライ！ニッポン大賞3件、審査委員長賞4件、ライフスタイル賞4件の計12件を選定いたしました。

グランプリに輝いた「農業法人 株式会社秋津野」（和歌山県田辺市）は、柑橘類を中心とした農村を活性化させるために、489名の住民が出資してコミュニティビジネスを成功に導きました。住民が出来ることは住民がする、という心意気のもと、単に都市部の人を田舎に招くのではなく都市と農村、食と農の乖離を減らすことを最大の目的とした交流事業を推進し、農産物直売所、農家レストラン、宿泊施設、手作りスイーツ工房やミカンの樹オーナー制度等と合わせた地域づくりの学校など、農山漁村コミュニティビジネス成功モデルとして他地区の参考になると高く評価されました。

その他の受賞者の皆様に対するコメントは、受賞内容をご紹介する各ページに記載させていただきましたのでご覧ください。

惜しくも受賞を逃された皆様の中にも魅力的な取組が数多くございました。今後、さらに充実した活動を継続されて再度のご応募いただきますよう、心からお待ちいたしております。

最後に受賞者の皆様をはじめ、関係するすべての皆様にこれまでの共生・対流に対するご尽力に感謝申し上げますとともに益々のご活躍とご発展を祈念いたしまして講評に代えさせていただきます。

平成31年3月20日

オーライ！ニッポン大賞 審査委員会
会長 安田 喜憲

第16回オーライ！ニッポン大賞の概要

●趣 旨

都市と農山漁村の共生・対流に関する活動を行いながら、交流の拡大や地域活性化に寄与した団体・個人、及び都市と農山漁村双方の生活や文化を楽しむライフスタイルを実践している個人を表彰し、その活動を広くPRすることで農山漁村を舞台とした新たなライフスタイルの普及推進を図ることを目的としています。

●表彰対象・審査基準

オーライ！ニッポン大賞

「都市側から人を送り出す活動」、「都市と農山漁村を結びつける活動」、「農山漁村の魅力を活かした受入側の活動」等を通じて、都市と農山漁村の共生・対流の拡大に寄与した実績や効果の高い団体又は個人。

(1) 募集の対象

- ・学生・若者カツヤク部門 主に30代までの若者の活躍により推進されている活動
- ・都市のチカラ部門 主に都市側からの働きかけによって推進されている活動
- ・農山漁村イキイキ部門 主に農山漁村側からの働きかけによって推進されている活動

(2) 表彰の種類

- ・オーライ！ニッポン大賞グランプリ（内閣総理大臣賞） 1件
※オーライ！ニッポン大賞と、連携表彰事業から推薦される「オーライ！ニッポン フレンドシップ大賞」の中から1件が選ばれます。
- ・オーライ！ニッポン大賞 3件程度
- ・審査委員長賞 5件程度

(3) 審査の基準

新規性	農山漁村地域を舞台とした新たなライフスタイルの提案、普及に関する取り組みであること。
独自性	地域固有の資源や個性を活かした、オリジナリティ豊かな取り組みであること。
持続性	法人化や収益向上等により持続性の高い取り組みであること。
モデル性	他地域への応用や波及が期待できるモデル性の高い取り組みであること。
効果性	農山漁村地域を活性化する効果があり、今後も効果が持続して発現すると見込まれること。
社会性	地域の内外の多様な主体が参加連携し、地域の課題解決に取り組んでいること。

オーライ！ニッポン ライフスタイル賞

UJIターンにより都市から移住した人、もしくは都市と農山漁村を行き来する二地域居住者等のうち、農山漁村において魅力的かつ新たなライフスタイルを実践し、都市と農山漁村の共生・対流に貢献している個人。

(1) 表彰の種類

ライフスタイル賞 3件程度

(2) 審査の基準

新規性	農山漁村を舞台とした新たなライフスタイルを実践していること。
独自性	個性的で魅力のある活動であること。
継続性	新たなライフスタイルの実践に継続性があること。
モデル性	新たなライフスタイルが他の人の参考となるものであること

第16回オーライ！ニッポン大賞審査委員会の構成

会長	安田 喜憲	ふじのくに地球環境史ミュージアム館長（オーライ！ニッポン会議副代表）
	井上 和衛	明治大学名誉教授
	岡島 成行	公益社団法人日本環境教育フォーラム会長、学校法人青森山田学園理事長
	志村 格	一般社団法人日本旅行業協会理事長
	長岡 杏子	（株）TBSテレビ アナウンサー
	平野 啓子	語り部、かたりすと、大阪芸術大学放送学科教授（オーライ！ニッポン会議副代表）
	元石 一雄	NPO法人水と緑の環境フォーラム常務理事

オーライ！ニッポン大賞グランプリ

あきずの

農業法人 株式会社 秋津野

(和歌山県^{たなべし}田辺市)

内閣総理大臣賞



■受賞者の概要

活動年数：10年（前身活動14年） 活動日数：年中

活動エリア：秋津野ガルテン

活動を担う人数：489人（スタッフ35人）

参加者数：7万人（延べ60万人）

■写真の説明

- ・(写真上) 秋津野ガルテン
- ・(左下) 収穫体験
- ・(真中) 農家レストランみかん畑
- ・(右下) オレンジジャム作り体験

■連絡先 〒646-0001 和歌山県田辺市上秋津 4558-8

☎ 0739-35-1199

■受賞の内容

秋津野ガルテンのある上秋津地区は、1956年（昭和31年）までは一つの村。古くからのミカン・柑橘を主体に南高梅などが栽培される農業が盛んな地域だった。農家は約330戸（内専業農家は約130戸）。昭和30年代から、住民主体の地域づくりが続いており、いたずらに行政をあてにするのではなく、住民ができることは住民がする。必要に応じて行政の支援・協力を仰ぐといった秋津野型の地域づくり行ってきた。1996年には農林水産省の豊かな地域づくり表彰事業で天皇杯を受賞。消費者との交流を目的に1999年住民出資で、農産物直売所『きてら』を開店。2004年9月地元柑橘を使ったジュース工房『俺ん家ジュース倶楽部』を立ち上げた。2007年には、心の地域資源でもある上秋津小学校跡地を再整備して、都市住民の方が気軽に農村に訪れられる空間やメニューを提供し、地域に人が来ることによって経済が生まれ、地域や農業が持続することで、地域を未来の住民たちにつないでいきたいと考え、内外住民489名の出資で農業法人株式会社秋津野を立ち上げ、2009年11月1日『秋津野ガルテン』をオープンした。農家レストラン事業は、放置された農園を復活させ野菜作りを行い、レストランへの食材や直売所へ出荷して収益を生み出している。運営は全て地域の女性が担う。

宿泊事業は、7部屋で32名の小さな施設と地元農家14軒が農家民泊の許可を取得し連携して受け入れている。農業体験事業は、柑橘・みかんが一年中収穫出来る。また、柑橘を使ったスイーツづくり、ジャムづくり体験、みかんや梅の枝を使用した草木染体験も行っている。市民農園事業は、廃園を復活させた園地で野菜を栽培しレストランへの食材提供とともに、貸し出しをおこなっている。ミカンの樹オーナー制度は、テレビ局と連携し、テレビ番組やインターネットでオーナーを募集して、ミカンの樹の成長、農家の作業、地域の様子などを毎月お便りとしてオーナーに伝え、田舎に親戚が出来たみたいだと好評である。秋津野ガルテンは10周年を迎え、農家レストランの利用者は約4万人以上、宿泊者数は年間約3,000人（内600人は外国人）。ミカンの樹オーナー制度は年間約450本、農産物の収穫体験やスイーツづくり、その他の体験では年間約2,000人。都市と農村の交流事業による農村に人を呼び込み、農家や地域の方との出会い、交流の場の提供を行ってきた結果、秋津野ガルテンが最終目的地になっている。また、成人式後の同窓会や地域のお年寄りが定期的に昼食を交えながら、数時間にわたり語り合う場所として活用され、今さらながらに木造校舎を残せてよかったと思う。



豊かな柑橘類と南高梅の産地、住民合意のもと489名の住民出資のコミュニティビジネスを成功に導き、住民が出来ることは住民がする、という心意気のもと、単に都市部の人を田舎に招くのではなく都市と農村、食と農の乖離を減らすことを最大の目的とした事業推進、農家レストランやミカンの樹オーナー制度等と合わせた地域づくり学校など、コミュニティビジネス成功モデルとして高く評価された。

オーライ！ニッポン大賞

うすざんしゅうへんちいき

特定非営利活動法人 有珠山周辺地域ジオパーク友の会

（北海道そうべつちよう 壮警町）



■受賞者の概要

活動年数：15年 活動日数：100日（延べ1,000日）

活動エリア：昭和新山、有珠山ロープウェイ他ジオサイト

活動を担う人数：135人

参加者数：3,000人（延べ20,000人）

■写真の説明

- ・（写真上）昭和新山子ども郷土史講座ガイド
- ・（写真左下）有珠山登山
- ・（写真真中）大木の桂の樹を参加者に囲んでもらい大きさを体感
- ・（写真右下）1977年噴火から40周年記念ジオツアー

■連絡先 〒052-0101 北海道有珠郡壮警町字滝之町 384-1
☎ 090-1302-4019

■受賞の内容

NPO法人有珠山周辺地域ジオパーク友の会は、2009年8月6日に設立認証。2～30年周期で噴火を繰り返してきた有珠火山の次なる噴火に対する備えやその特性を学ぶ学習会を通じた減災文化の伝承に力を注ぎ、地域防災力を高めることを主な柱としている。壮警町や周辺自治体で推進する洞爺湖有珠山ジオパーク及びエコミュージアム・自然博物館づくりと連携し、火山と共生するふるさとを学び、地域文化の伝承、地域の魅力の発信、ガイド活動、人材育成と交流の促進を実施している。昭和新山登山学習会、有珠山登山学習会（入山禁止区域に入るジオツアー）、洞爺湖中島散策会、オロフレ樹氷観察スノーシューツアー、教育旅行ガイド、地元小学生の郷土史講座防災学習への協力等、社会に対して先人たちが築いた災害を減らし自然と親しみながら火山との共生を図ることを学ぶ場所を創出。先人たちの築いた「災害を減らす文化」の継承しつつ、入山禁止区域へのジオツアーを通じて、企業と連携しながらジオパークにおける災害を減らす取り組みに教育旅行のプログラムとして確立した。年間160団体3,000名ほどのお客様に対して火山マイスターの会員がガイド活動に貢献している。

代表理事の三松三朗氏（三松正夫記念館館長）は、1945年9月20日、全活動停止した昭和新山を観察し全財産を擲ち保護した壮警町の郵便局長、三松正夫の私有財産である昭和新山とその観察記録を相続し、私設博物館「三松正夫記念館」を1988年に開設、1977年の有珠山噴火で、火山の特性を学ぶことにより命を救えることを実感し、防災活動に傾倒し、地元の小学生に昭和新山登山を通じて「生きている地球」を学ぶことから地域の宝と災害を減らす学習活動を継続し、地域防災計画に深く携わる。有珠山周辺自治体のエコミュージアム構想に主体的に関わり、火山災害遺構を生かした観光地づくりなど現在のジオパークに繋がる取り組みを推進した。災害が収まった後はガイド活動を通じて来訪する観光客に「火山との共生」文化を紹介し、生きている地球と仲良く付き合うことで、心豊かに自然を愛し、地域への愛情が生まれることをひろめ、有珠山周辺地域のガイド育成に奔走。「災害は防ぐことはできないが、災害を減らすことは可能である」を持論に、地域防災の担い手である「洞爺湖有珠火山マイスター制度」の創設に尽力し後進の育成にも力を注いだ。



自然への畏敬の念を忘れがちな現代人に、火山噴火という自然の怖さを教え、災害を減らす学びをジオパークとして推進し、都市生活者との交流や人材育成などにも力を注ぐ取り組みは、自然災害の多い我が国には必要不可欠なモデルとして高く評価された。

オーライ！ニッポン大賞

おおだてし

大館市まるごと体験推進協議会

おおだてし
(秋田県大館市)

■受賞者の概要

- 活動年数：8年（前身活動6年）
- 活動日数：244日／年（延べ511日）
- 活動エリア：大館市全域
- 活動を担う人数：100人（スタッフ2人）
- 参加者数：約1,912人（延べ約12,414人）

■写真の説明

- ・(写真上) 秋田弁ラジオ体操
- ・(写真左下) アメリカのお客さんも大喜びのたんぼ体験
- ・(写真真中) ほっこり農家民宿
- ・(写真右下) 爆笑！秋田弁講座劇を楽しむ修学旅行生

■連絡先 〒017-0031

秋田県大館市上代野字稲荷 1-1

☎ 0186-43-7149

■受賞の内容

当協議会は、地域の伝統食である「本場のきりたんぼ」づくり体験、農業体験、農家民宿などのグリーン・ツーリズム体験受入れを行っている。この受入れは、2003年の夏、大館市（当時は比内町）出身で札幌市の教員である菅原先生が話した1つのエピソードから始まった。中学校の生徒や先生たちが「きりたんぼを食べたことがあるけどおいしくなかったよ」と言っていたこと、そして詳しく聞いてみると、それを食べたのは大館市以外の地域であったこと。大館市はきりたんぼ鍋に欠かせない比内地鶏の日本一の産地であり、その新鮮で脂がのったコクのある比内地鶏を使ってきりたんぼ鍋を作るため、「きりたんぼの本場」と言われている。その本場大館のきりたんぼを生徒達に食べさせたい！と菅原先生と農家のお母さん、役場の職員が立ち上がり、2004年より修学旅行受入れが始まった。その後、本場のきりたんぼの味と農家のお母さん達のおもてなしが評判となり、訪れる学校が年々増えて行った。農家のお母さん達は、訪れた生徒の笑顔に触れ、一生に一度の修学旅行を最高の体験にしてあげたい！縁あって訪れた大館市を好きになってもらい

たい！という思いをさらに強く抱くようになり、方言からも地域を伝える「爆笑！秋田弁講座劇」や「秋田弁ラジオ体操」を作った。また、修学旅行で訪れた生徒たちがまた大館に戻ってくることができる場所をつくらうと、農家民宿の認可を得た。これらのおもてなしは、本業である農作業が終わった後、何度も集まって話し合いを重ね、作り上げた温もりの結晶である。このような取組みが評価され、新聞やテレビ、ラジオなどで取り上げられた結果、札幌市以外の学校も修学旅行に訪れるようになった。また「JTB 交流創造賞」を受賞したことをきっかけに、この日本一の体験を海外のお客さんにも体験していただき世界一を目指したい！という思いで、海外からの誘客促進にも取組み、2017年より外国人客の体験や農家民宿宿泊の受入れも順調に増加している。地域にある素材を背伸びすることなく活用し、1人でも多くの方に訪れてもらいたい。そして訪れて頂いたからには一生忘れられない思い出を持ち帰ってもらいたい。そんな温かい気持ちで、国内外を問わず、訪れて頂くお客様の体験や宿泊受入れを行っている。



本場のきりたんぼと秋田弁でおもてなし。秋田弁ラジオ体操などの発想も豊か。地域の素材にアイデアとユーモアを盛り込んで取り組む姿は“日本中のお母さんたちにも立ちあがってほしい”と思えるほど。農家のお母さんの頑張りが成功を導いたと高く評価された。



■受賞の内容

第2のふるさどが見つかる離島・農山漁村住み込み型のボランティアを「村おこしボランティア」と名付け、受け入れ地域と連携してプログラム化、ECOFF は集客や事務作業のサポートに徹している。参加者は国内外の秘境に行き、全国から集まった同世代の仲間たちと10日間の共同生活を行いながら、農作業や伝統行事のお手伝いなど、その地域がその時、必要としているボランティア活動をする。現在は30ヶ所で展開。年間477人が参加している。助成金等には一切頼らず参加者側に必要最低限の費用を負担してもらい受入地域の負担も軽くする。2019年現在募集中の春休みの活動エリアは、焼尻島(北海道)、八幡平(岩手)、綾里漁場(岩手)、三宅島(東京都)、琵琶湖沖島(滋賀県)、種子島(鹿児島)、さつま竹島(鹿児島)、中之島(鹿児島)、悪石島(鹿児島)、宝島(鹿児島)、奄美大島[北部](鹿児島)、与論島(鹿児島)、やんばる(沖縄県)、台湾澎湖(ポンフー)、ベトナム。また、夏休みか春休みに1~2ヶ月離島や海外の田舎に滞在し、地元の方と学生ボランティアのサポートをする「超現場主義インターン」の島インターン制度もある。参加者は国内外の秘境に行き、全国から集まった同世代の仲間たちと10日間の共同生活を行いながら、農作業や伝統行事のお手伝いなど、その地域がその時必要としているボランティア活動をする。



■受賞者の概要

活動年数：8年 活動日数：851日（延べ3,103日）
活動エリア：鹿児島県離島および全国各地の離島
活動を担う人数：22人（スタッフ2人）
参加者数：477人（延べ1,696人）

■写真の説明

- ・(写真上) 沖縄やんばるでの伝統行事のお手伝いの様子
- ・(写真左下) 三宅島での島民とのDIY活動の様子
- ・(写真中下) 宝島でのバナナファイバー作りのお手伝い
- ・(写真右下) 奄美大島での米の収穫

■連絡先 〒113-0021 東京都文京区本駒込2-4-12

☎ 050-5809-3263

受け入れ側の地域が事前に決めた日程に、4~10名ほどの学生が滞在し、公民館や空き家などの休眠施設を活用して実施する。初心者でも比較的 safely 参加できる農業ボランティアや地域行事のお手伝いなどが主な活動内容だが、その地域の人々の役に立ててその地域のことを好きになるような内容であれば何でもプログラムに取り入れている。これらの活動内容は原則として現地側に一任し、ECOFF は集客や事務作業などのサポートに徹している。たった1ヶ所から始めた活動が現在は30ヶ所に拡大し、さらに毎年受け入れ地域が増え続けている。助成金等には一切頼らず参加者側に必要最低限の費用を負担していただくことで安定した資金調達を行っていることも受入の農山漁村地域の参入障壁を低くしている。2011年の活動開始以来、資金不足による活動の中止は一度もなく、今後も受け入れ地域と参加者が望むかぎり継続していけるとことが判明したのもこの活動の成果。また、長期的な成果としては、事務局が把握しているだけでも10名近い参加者が村おこしボランティアを通じて知った地方に移住しており、大学卒業後に地域おこし協力隊など地域活性化に関わる職業を選択した参加者も少なくない。繰り返しECOFFの活動に参加される方はもちろん、参加したことのある地域に個人的に遊びに行く参加者も毎年大勢報告されている。

助成金などに頼らず、都会の若者を誘導するための重要な基本形「費用自己負担」「純粹に楽しむこと」「きちんとした報告をする」ことなど、大学のインターン制度や実習に使えると高く評価された。

オーライ！ニッポン大賞

しぜんたいけんきょういく

特定非営利活動法人 グリーンウッド自然体験教育センター

やすおかむら
(長野県泰阜村)



■受賞者の概要

活動日数：350日（延べ11,200日）

活動エリア：泰阜村内

活動を担う人数：350人（スタッフ16人）

参加者数：20,052人（延べ310,000人）

■写真の説明

- ・(写真上) 行列のできる「信州子ども山賊キャンプ」
- ・(写真左下) 学びの中心は暮らしの学校「だいだらぼっち」
- ・(写真真中) 猟師が都市部の子どもたちにリアル食育授業
- ・(写真右下) 女性が集う村になるのど誰が想像しただろうか

■連絡先 〒399-1801 長野県下伊那郡泰阜村 6342-2

☎ 0250-25-2851

■受賞の内容

NPO 法人グリーンウッド自然体験教育センターは、次代の担い手である青少年が「心の豊かさ」や「生きる力」を育んでいくことを支援するために、森・川をフィールドにした多彩な自然体験教育プログラムを展開。山村留学・暮らしの学校「だいだらぼっち」は小学3年生～中学3年生までの子どもたちが親元を離れ、泰阜村の小中学校に通いながら宿泊棟で1年間の共同生活、「信州子ども山賊キャンプ」は毎年夏に約1,100人の子どもたちが参加する2泊3日のキャンプで小学1年生～中学3年生までの異年齢の子ども20～50人のグループに分かれて実施している。その他、将来教育者や指導者を目指す若者が、子どもたちと生活を共にしながら1年間実践で教育を学ぶ「山賊キャンプ」はOB・OGを含め、全国から300人を超すボランティアが集まるなど山村地域の資源を活用した教育活動を行っている。グリーンウッドは村内最大規模の団体に成長し、絶対無理だと言われていた自然環境を資本とした産業を成立させた。その産業の中身は「教育を中心においた都市山村交流」。NPOの予算規模は約1億円。自主事業収入が8割を超えNPOを経営的に自立させている。支出の内約7,000万円が地域に還元される。交流人口は年間2,000人超、延べ人数約2万人となり、長期滞在型の都市山村交流事業開発、定着に成功したと

いえる。人口1,600人の村で20人弱の若者を雇用するNPOは「小さな大企業」。若者の雇用と定住を実現させ、自治会や消防団など地域を支えていた住民組織の担い手としての期待にも応えつつある。村の有志がNPOを立ち上げ、民宿や農家レストランの運営を始めた。撤退したガソリンスタンドも、村民による自主運営で引き継いでいる。これまで面倒くさいことはすべて役場職員に任せきりだった村民が、役場に押し付けることなく自らの手で自律的な動きを作りつつある。3年前に小さな村の教育力を大学等の高等教育に活用しようと村のNPO、村民、行政、都市部大学、報道機関などが力を合わせて「泰阜ひとねる大学推進チーム」を発足させた。そして今、村内に都市部の若い女子大学生が学ぶ姿が目立ち始めた。ヨソモノと村民が協働する「自律」への取り組みに刺激され、若者のU・Iターンが増え(7年間で114人)青年団まで復活した。3年程前から山村留学の卒業生がIターンで村に定住する現象も始まり、村に3つあった限界集落は消滅しつつある。都市部に住む卒業生と同年代の村民たちとの交流・ビジネスも始まっている。そして今年、村の保育園に待機児童が出て「教育を中心においた都市山村交流」が地域再生の中心に位置付き、疲弊しきった山村に希望の灯がともし始めている。



厳しい財政、産業も廃れ、若者も流出していく疲弊しきった山村を「教育を中心においた都市農村交流」により、地域再生に成功した事例として、他の模範となる活動であると高く評価された。

オーライ！ニッポン大賞審査委員長賞

みどり おうこく
ふかや緑の王国ボランティア

ふかやし
(埼玉県深谷市)



■受賞者の概要

活動年数：11年 活動日数：136日

活動エリア：ふかや緑の王国

活動を担う人数：103人

参加者数：2,607人

■写真の説明

- ・(写真上) ガーデン整備
- ・(写真左下) 竹林整備作業
- ・(写真真中) 梅まつり準備
- ・(写真右下) どんと焼き

■連絡先 〒366-0815 埼玉県深谷市榑引 24-2 ふかや緑の王国内
☎ 048-551-5551

■受賞の内容

ふかや緑の王国ボランティアの活動拠点である「ふかや緑の王国」は、2006年3月に廃止となった埼玉県農林総合研究センター園芸研究所深谷試験地を2008年に深谷市が埼玉県から譲り受けた。ふかや緑の王国ボランティアは、「市民がつくり 市民が守り育てる 市民の森」をコンセプトとして、市と協働により管理運営を行い、市民との協働による花と緑のまちづくりの推進を図る場として、さらに市民が四季折々の自然と触れ合う憩いの場として「ふかや緑の王国」の管理運営を行うことを目的としている。

【市民の力を市民のために】ふかや緑の王国ボランティアはふかや緑の王国を活動拠点とし、「市民が作り、市民が守り育てる市民の森」を目指すことから、その管理運営についてもボランティアの力を最大限に発揮。ふかや緑の王国内で活躍するボランティアは、「王国ボランティア」として活動している。ボランティア活動については、ボランティア自身が楽しみ、そして来園者にも楽しんでいただくことを念頭において活動を行っている。バラをメインとしたローズガーデン、ハーブや香りのある草花などで癒しを与えるヒーリングガーデンなど、各種ガーデンや昭和30年代の農村風景の再現を図った

「ふかや村」、冒険・昆虫の森(防風林)などを整備し、年間を通して都市から多くの来場者を受け入れている。また、3月に梅まつり、6月にホテル鑑賞会、米づくり体験、7月にトモロコシとじゃがいもの収穫体験、10月に森の音楽祭、11月に里芋とサツマイモの収穫体験、紅葉ライトアップ・あかり展、秋まつりを開催し、また、通年でバードハウスコンテストや写真コンテストを開催するなど季節や自然を感じられる各種イベントやコンテストを開催し、都市から多くの来場者を受け入れている。

また、市内の小学生を対象に、緑の王国の自然とともに遊ぶ「王国自然クラブ」も毎月開催。王国ボランティアと一緒に米作り体験、繭玉作りやどんと焼きなどの活動を行い、自然からエネルギーをもらって、たくましく育ててもらうことを目的としている。

「市民がつくり、市民が守り育てる、市民の森」をコンセプトは、市民に自然との触れ合いの場や憩いの場を提供するとともに、ふかや緑の王国内の緑を守り育てる活動に参加するボランティア全員が結集し、互いに意見を述べ、市民と楽しく交流し市民との協働による花と緑のまちづくりを図る活動を行っている。



自然が欲しいと行政に頼り切るのではないとの思いで活動する市民ボランティアの活躍と行政との協働が、市民に自然にふれあう機会を自ら創出しているとボランティア活動事例の成功例と高く評価された。

オーライ！ニッポン大賞審査委員長賞

一般社団法人 マツリズム

(東京都中央区)



■受賞者の概要

活動年数：5年 活動日数：200日（延べ600日）

活動エリア：奥州市、釜石市、二本松市、秩父市、墨田区、小田原市、熱海市、飛騨市、雲南市、三好市、壱岐市

活動を担う人数：7人（2人）

参加者数：195人／年（延べ600人）

■写真の説明

- ・（写真上）地方の祭りに参加
- ・（写真左下・真中）地方/下町の祭りに参加
- ・（写真右下）まつり会議

■連絡先 〒103-0002 東京都中央区日本橋馬喰町 2-6-4

☎ 080-6550-7084

■受賞の内容

村や町の祭を真ん中から体験するプログラム、名付けて Ma-tourism を全国で展開。外側から祭を観る「観光」とも、祭への「参加」とも異なり、その祭の歴史を学び、祭を行う人達と触れ合い、祭に「混じる」のが魅力である。祭はある意味で閉じられた神事・仏事・イベントであるが、あえてそこに「よそ者」として飛び込み、時に疎ましく思われ、時に受け入れられ、その中で自分について考える、そんな機会を提供しているのがマツリズムである。一般社団法人マツリズムは、祭りを存続させていくために最も重要となる「ヒト」に焦点を当て、受入地域側にはお祭り催行のために必要なマンパワーを提供し、祭りをはじめとする地域文化の体感プログラムの開発・提供、祭り・地域文化に関する効果的な情報発信などを行っている。祭りの実施地域は、外部からの参加を受け入れることで、お祭りを部外者に語ることで地域や祭りの魅力を再発見する機会を得ることができる。参加者からの「楽しかった」「また来たい」という声による地域の誇りと自信の創造を行っている。参加者は非日常体験によって愛着を持つ地域が増え、自身と地域コミュニティの関係性を見つめ直す機会にもなる。特に地方の祭りの担い手にとっては、都心部に自分たちの祭りに関心を持っている外部の若者がいることを知り、お

祭りを存続させるための変革への意欲を高める場となっている。大原代表理事は、大学生の頃、塞ぎ込んでいた時期に祭りに救われたことをきっかけに、「祭りの力」に惚れ込み、5年前に活動を始めた。

マツリズムは「祭りの力で人と町を元気に」をモットーに多様な人が混ざり合い支え合う感謝と受容の社会づくりを目指している。担い手不足に悩む地方の祭りや首都圏の若者や外国人を、地縁を超えてつないでいくことで祭りの次代への継承と地域の活性化への試みであり、埋もれた地域資源に光をあて、文化継承・観光振興・移住定住促進などにも波及させていこうとするプロジェクトでもある。

祭りの担い手関係者が集まるワークショップ「祭りがいぎ」は、ノウハウ共有とネットワーク構築をすることができる。また、動画作成や情報発信によって「お祭りに参加したい！」と思う参加者候補を生み出し、取り組みを継続実施することで、全国規模でお祭りと参加者のマッチングが可能となり、祭りを通じて人と人がつながっていく社会が実現されると考える。マツリズムの参加プログラムをこれまで約30回実施。延べ参加人数400人（参加者のほとんどは東京圏からの参加。アメリカ、トルコ、アイルランド、インド、インドネシア、韓国、中国、ブータン出身者も参加している。



人の心を豊かにする祭り。祭りに救われた若者が、祭りの担い手が減少し困っている地域を助けるために、祭りに興味を持つ若者を送り出す仕組みを創設。祭りを通じて、人と人がつながっていく社会の実現へと壮大な取り組みへの発想力行動力が評価された。

オーライ！ニッポン大賞審査委員長賞

つきかけ さと

月影の郷運営委員会

(新潟県上越市)



■受賞者の概要

活動年数：14年 活動日数：183日（延べ1,628日）

活動エリア：旧校区（7町内会）

活動を担う人数：34人（スタッフ1人）

参加者数：7,944人（延べ59,275人）

■写真の説明

- ・(写真上) 遠足
- ・(写真左下) 体験：動植物観察
- ・(写真真中) 柴又小お別れの会
- ・(写真右下) 田植え

■連絡先 〒942-0322 新潟県上越市浦川原区横住 410

☎ 025-599-3302

■受賞の内容

旧月影小学校を再生活用した宿泊体験交流施設「月影の郷」を活動拠点として、地域のお父さんとお母さんによる会員の手により「月影の郷」を管理・運営と交流事業を行っている。この地域活性化の取り組みにより会員をはじめ地域の住民が幸せになれることを目的としている。開校は1874年、多いときは300名余りの児童がいた月影小学校は、2001年3月に閉校した。この月影小学校の旧校舎について、村の要請を受けた法政大学、横浜国立大学、早稲田大学、日本女子大学の建築系4大学が共同で再生計画を提案し、地域と大学、行政の協働で校舎の改修事業を行った。2005年4月より宿泊体験交流施設「月影の郷」として、市から指定管理者の許可を受けた「月影の郷運営委員会」が運営している。閉校決定時(2000年9月)から4大学の各研究室で学ぶ大学院生と協働で進めた旧月影小学校再生プロジェクト(月影リノベーション)は、閉校した2001年から10年間取り組んできた活動の節目として2010年にプロジェクトブックを作成し、お披露目会を開催した。その後も継続した活動により2014年度には3階音楽室の改修で全館整備が完了したことから2005年4月のオープン以来、10周年記念式典を開催した。今日までの再生活動に要した大学生や院生は延べ180名を超え、2015年度からは先輩学生が取り組んできた施設内の「民具農具の展示物」などの修復活動に着手。活動の内容は、(1) 統合先の小学校を始め、幼稚園や中学校

、高校、大学など学校関係が行う行事、各種体験学習の活動、卒論ゼミや各種スポーツの合宿、同級会、冠婚葬祭等による「宿の提供」(2) 上越市が進める「地産地消」を基本とし、会員の自給野菜や地元農家の食材を活用した「食事の提供」(3) 田舎体験メニューとして、《食体験》手打ちそば、笹を使った(押し寿司・箕寿司・笹団子)、米粉うどん、ちまき、のっぺ汁、季節の天ぷら等。《農業体験》田植え、稲刈り、畑作業。《工芸体験》竹細工(ゆらゆらトンボ・黒竹を使った昆虫・竹の器と割り箸)、わら細工(ぞうり・わらマット等)、石のペイント、各種手芸。(4) 都市部と地元住民との交流を促進するためのイベントの開催「冬の広域連携イベント:灯の回廊&かまくら交流フェスタ」(2月)、月影芸能まつり(6月)、東京浦川原会との交流会(10月)、岩室塾:建築トークイン上越(10月)、新そばまつり(11月))を中心に会いや交流活動に取り組んでいる。

校舎2階の宿泊部屋には「1年教室」などと書かれた白のプレート。これを見て子どもは心躍らせる。大人にも楽しんでもらう趣向のひとつが夜のランタン。明かりを消し、食堂の机にランタンをともして食事をしたり、部屋に戻る際に持ち運んでもらったりしている。「ワクワク感を楽しめるランプの宿」だ。山菜のてんぷら、押しずし、郷土料理の「のっぺ汁」など「地元の食材を使った田舎料理も魅力的」とNIKKEIプラス1での廃校の宿で全国8位と評価された。



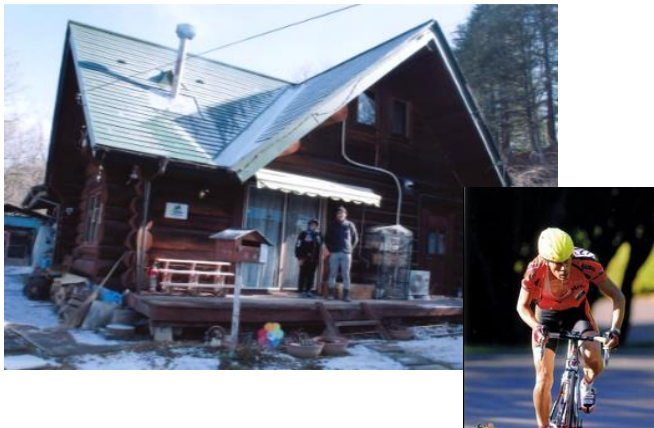
廃校校舎を建築系の大学生と改修工事し宿泊体験施設としてオープン。小中高大学生など幅広い世代と食・農業・工芸の体験学習活動を実施。廃校の宿で8位にランクなど社会的にも注目されているなど高く評価された

オーライ！ニッポン ライフスタイル賞

「コミちゃんファーム」代表、農家民宿「ファームインコミネ」オーナー

こみね えつお
小峰 悦雄さん (67才)

まつもとし
(長野県松本市)



■受賞者と農山漁村との関わり

【移住】27年

【地域での実践活動】27年

■写真の説明

- ・(写真上) 農家民宿「ファームインコミネ」前のご夫婦
右下はマスターズ自転車競技に出場
- ・(写真左下) コミちゃんファームのワイン用ブドウ畑
- ・(写真右下) 自宅近くの高台から望む北アルプス

■連絡先 〒399-7411 長野県松本市中川 7472-イ
☎ 0263-64-2607

■受賞の内容

小峰夫妻は1992年に現在地に移るまでは共に東京八王子市職員だった。自然が好きだった二人は仕事の傍ら、休みには小峰さんは国立公園尾瀬で妻は高尾山でボランティアのパークレンジャーをしていた。また、独自に自分たち主催で親子自然観察会を開き、開発されつつある多摩丘陵の自然保護を訴えていた。

一方、食の安全にもこだわり生活協同組合に入り様々な活動をしていた。また、子供をより自然の中で生活させたいと長男を長野県小谷村に山村留学させていた。そんな生活は充実していたように思えるが、いまひとつ本当に自分が追い求めるライフスタイルとは違う気がしていた。食にしろ農業にしろ自然にしろもっと地に足をつけて実践の中から物事を考える人生を送りたいと移住を決意した。

新規就農は本当に大変だった。住む家から納屋、農機具の取得、栽培技術に加え、地域との関りや小学生と中学生の子供の子育ても加わり、死に物狂いで動き回った。退職金ばかりに頼るわけにはいかず、農業の合間には造り酒屋や山仕事、引っ越し、卵の運送などあらゆる仕事をしたが、よく身体がもったものだと我ながら感心した。



就農から5年位たった頃、借家でなく自分の家を建てようと、知り合いに土地を分けていただきログハウスを自力で建てた。丁度その頃、現在栽培しているワインブドウの話もあり、地ならしから支柱建てまでバックホー(重機)を使いこれも自力で完成させた。現在は子育てを終え、今は妻と二人の生活で、春から秋を中心に小峰さんは主にワインブドウ(シャルドネ・メルロー)の栽培と稲作90アールを管理し、妻はハウス野菜(ミニトマト・パプリカなど)と露地野菜(馬鈴薯・葉物野菜・切花など)、小麦を栽培している。

子供たち2人は地元の方と結婚して家も建て暮らしている。昨年末には自宅を農家民宿として登録し、今年から本格運用し、都会の人に農業体験やアウトドア体験をしていただくと考えている。余暇活動として小峰さんは若いころから続けている自転車競技やランニング大会に時折出場し、障がい者スポーツ指導員として視覚障がい者の伴走練習やチェアスキーのサポートなどを行っている。妻はソフトテニスの大会に出場や地域の子供たちへの書道指導もしている。就農以前から発行している「家族新聞」(月刊)には日々の泣き笑いが綴られている。



安定した公務員を辞めて40歳から新規就農。夫婦で、ワインブドウの栽培と稲作、野菜などを作る。町会長や氏子総代などもこなし、地域にとけ込む努力と趣味のマラソンや自転車の大会の開催提案などアイデアを提起し続けている。人生100年時代のお手本として高く評価された。

オーライ！ニッポン ライフスタイル賞

愛する限界集落に新しい風を入れている熊野市集落支援員

ほかぞの じゅんいち
外園 淳一さん (35才)

くまのし
(三重県熊野市)



■受賞者と農山漁村との関わり

【移住】6年

【地域での実践活動】8年

■写真の説明

・(写真上) 作業終了後の集合写真 (17年国際ワークキャンプ)

・(写真右下) 国指定「赤木城址」での作業の様子

■連絡先 〒519-5403 三重県熊野市紀和町長尾 1092-4
☎ 090-5406-7170

■受賞の内容

1983年の東京生まれ東京育ち。大学卒業後、食品会社に5年間勤務。仕事・生活に悩み転職を考えているときに、制度として始まったばかりの「地域おこし協力隊」の募集を発見した。

大学時代に九州(熊本・大分)で地域活性化に携わる4年間のボランティア活動の経験・スキルを活かせると考え、また妻が三重県出身だったこともあり応募した。なにより両親からの「学生時代、地域活動に励んでいた頃のお前は明るく楽しそうだったぞ!」という言葉に背中を押された。2011年に「三重県熊野市移地域おこし協力隊」に採用され、熊野市紀和町西山地区という中山間地域人口200人弱、高齢化率74%の中山間地域に妻と共に移住し、活動を開始した。その後、3年間の任期全う後に一旦地域を離れるも、この地域が好き過ぎて2016年「熊野市集落支援員」として同地域に再移住し、現在に至る。

再移住の直前に脳腫瘍を患い、手術を4回受ける。移住先の地域の方々に温かい声援と励ましの声を頂き後遺症なく現場に復帰。子供2人にも恵まれて家族4人で楽しく・明るく生活を送っている。2011年から取り組んでいる「週末・国際ワークキャンプ」は、「集落の維持・活性化活動が高齢化により住民の力だけでは限界が来ている。若い人の助けを借りることが出来れば」という声を聞き、過去に自分が所属・活動していたNPO法人NICE(新宿)と連携すれば、都市部の若者を1泊2日で呼び込み地域作業の協働で行う「週末ワークキャンプ」が可能と実施した。

これまでの活動として、地域にある国指定の史跡「赤木城跡の整備」、地域のお盆前の草刈・清掃作業

に参加、地域内のイベント(桜祭り・春祭り等)の支援、地域住民と都市部の若者たちの交流会(主に地元ジビエでBBQ等)を行っている。私は、地域と若者達を繋ぐコーディネーターとして、企画の立案、地元調整、メディア対応、運営リーダーとして活動をしている。国内の若者達は主に、20~30代。男女比は半々程度。これまで、東京・三重・愛知・滋賀・大阪・兵庫・奈良・神奈川・岐阜・京都・福岡から参加をしている。また、ロシア・イタリア・中国・フランス・香港・ベトナム・メキシコ・スペインから参加があり、日本人は社会人の参加が多い。12回開催を行い、最高で6回参加する人や2~5回など複数回訪れるリピーターも増えてきている。現在は開催する度に全国各地から10名以上の参加者が集まり、地域の公民館で自炊しながら寝泊まりしている。熊野で一番の高齢化率74%の限界集落が、東紀州で国際交流まで出来る最先端の地域に成長して一番の交流人口が生まれている場所となった。また参加者と地域住民が手紙のやりとりをしたり、電話で連絡を取り合ったりしている。結婚や出産の報告等があれば、地域の方も嬉しそうに私に報告してくれている。これも地域の方々の、都市部の若者を受け入れる広い心と、外国人も受け入れてしまう積極性によってもたらされたものだと考えている。将来、参加者の中からこの地域に移住を検討してくれる人が出てくれればと思っている。



東京生まれ東京育ちの若者が地域にほれ込み、家族と移住。高齢化の限界集落と都市や世界とを結びコーディネーターとして自分の経験を活かして、生き生きと暮らすライフスタイルに限界集落打破の可能性が灯ると高く評価された。

オーライ！ニッポン ライフスタイル賞

若手移住漁師、漁船・遊漁船「海来」船長

まつお たくや
松尾 拓哉さん (28才)

むろとし
(高知県室戸市)



■受賞者と農山漁村との関わり

【移住】3年

【地域での実践活動】3年

■写真の説明

- ・(写真上) 佐喜浜自宅での家族写真
- ・(写真左下) 室戸のイベントで行った四国最大のふれあい移動水族館
- ・(写真右下) 室戸ジオパークセンターで行われた夏休み1日先生

■連絡先 〒781-7220 高知県室戸市佐喜浜町 1289-2

☎ 0887-27-3990

■受賞の内容

大阪出身。幼いころから室戸の海、漁師に魅せられ、室戸に「漁師の水族館」を作りたいとの夢をもち、関東、近畿の水族館で飼育員として、サメや深海生物等の飼育、移動水族館当の運営に携わった後、室戸市に移住。漁師を生業にしなが、身近な海の生き物をテーマにした体験学習プログラムなどを地域の学校やイベントなどで実施している。様々な企業や全国の水族館の協力を得て、新たな資源開発を行い持続可能な漁業を目指している。

松尾さんは、幼いころから生物を飼育するのが好きでフィールドに行くのが好きだった。室戸市には、小学校3年生の頃から縁があり、学校が長期休みになると電車とバスを乗り継ぎ大阪から一人で室戸まで行き、知り合いの民宿の手伝いをしながら定置網で採れた魚を譲ってもらったり、自ら海に潜り魚を採取し水槽で飼育したりしていた。子供の頃、魚の種類が多い事、美味しい魚が多い事、珍しい生物、特に深海の生物がたくさん生息していることに気付いた。

どうして室戸は様々な種類の生物を見ることができるのか調べると、室戸は世界ジオパークにも登録されている地形で陸から深海が近く海洋深層水があり、沖には黒潮が流れる素晴らしい環境にあり、その環境を利用した定置網などの漁業がある地域だとい



うことを知った。そのころから将来、室戸に住んで漁師になりたい、水族館をつくりたいと思い、茨城県の大洗水族館に就職、さらに和歌山県の水族館に転職し、和歌山と徳島を歩き来しながら水族館を作るための技術を学んだ。室戸市には2016年4月に漁業研修制度を利用し家族で移住した。子どもの頃からお世話になっている漁師の師匠から漁業やホエールウォッチングの仕事を学んだ。師匠は日本で2番目にホエールウォッチングをはじめた方で、後継ぎになるために弟子入りをした。ほかにも室戸ジオパークガイドの会にも加入してジオガイドの活動をおこなったり、地元の消防団をはじめ様々な活動に参加している。また、地元NPOにも参加し、地元では食べられていなかった海洋生物を使った新たな商品開発やイベントなどでジオピザなどの商品販売行っている。今まで難しかったキンメダイの全国への活魚輸送や商品価値の無かった深海生物の食品化などの海洋資源に付加価値をつけて、室戸ブランドとして発信してできるよう取り組んでいる。この4月からは自分の船を持ち夫婦で体験漁業や海から見るジオパークを実施していく。



自分の夢を叶えるために、熱心な調査研究、行動力により一步一步着実に計画を進め、漁師の水族館として活動し、さらに持続可能な漁業を目指す姿は、今後も大いに期待したいと高く評価された。

オーライ！ニッポン ライフスタイル賞

穎娃のお福分け 旅と宿の女将

せがわ ちか
瀬川 知香さん (32才)

みなみきゅうしゅうし
(鹿児島県南九州市)



■受賞者と農山漁村との関わり

【移住後】3.5年

【地域での実践活動】3.5年

■写真の説明

- ・(写真上) 瀬川知香さん
- ・(写真左下) 福のや前で地域の人たちと
- ・(写真右下) 畑で、にんじんの収穫

「穎娃のお福分け」で販売も

■連絡先 〒891-0701 鹿児島県南九州市穎娃町郡 1554
☎ 080-6409-1850

■受賞の内容

昨年結婚した主人は農業、私は宿泊業。築70年の古民家を住民と共に改修し、一棟貸しの宿泊業「暮らしの宿 福のや、」を営業している。

瀬川氏は、高校時代から観光や旅行の分野に強い関心を持ち、旅行業界を志して、大阪の旅行系専門学校に進学した。大阪の旅行代理店に新卒で総合職として入社。企画・手配・添乗・営業と様々な部署で経験を積み、3年後、着地型観光に強く関心を持ち地域住民と地域のための取り組みたいと考え、高知県安芸市の観光協会に1ターン転職する。3年半ほど受入体制の充実や県内外からの観光客集客のため、旅行会社などへの営業を担当。着地型観光に一生携わるために地元の鹿児島に帰る決意してUターン。いちき串木野市で観光案内所のNPO 法人化や旅行業登録を担当し、まちの旅行社としてバスツアーや体験プログラムの企画販売に取り組んだ。現在活動をしている穎娃町(えいちょう)のまちおこしメンバーと出会い「地域のための観光」をと考え、穎娃町の基幹産業である農業を発展させるために畑に観光客を呼び込む動きや空家や空き店舗が増える商店街に新たな人の流れを創出するため観光客誘致に取り組む姿に強く共鳴し、

南九州市穎娃町に移住した。

穎娃町は、母の故郷で子どもの頃から慣れ親しんでいた。移住して1年後、日常の暮らしにこそまちの魅力があると考え、「暮らしの宿福のや、」をオープンした。

宿滞在者や日帰り客のため、「小さな旅」と題し、穎娃の農風景へと案内する「畑旅(はたたび)」や海岸散歩、星空さんぽなどのプログラムの企画販売も行っている。

一棟貸しタイプの宿「暮らしの宿福のや、」は、築70年の古民家で地域住民とともに改修した。

「畑旅(はたたび)」は、農業と観光を掛け合わせた取り組み。農家さんと一緒に畑を巡り、風景を楽しみながら収穫体験をするツアーである。トウモロコシの苗植えやポップコーンづくり、畑でのランチやお茶会など、通年通して楽しめる内容。冬には南九州市名物・大根やぐらに登るツアーもある。畑で食べるトウモロコシは格別である。特別なことはしない。いつもの暮らしを“おすそ分け”するというのがテーマである。旅、宿、農、食をつないで産業を目指し、地域の人々と協力しながら穎娃町ならではの仕事づくり豊かな自然に囲まれながらの田舎暮らしを楽しんでいる。



畑に観光客を呼び込む「畑旅」の体験プログラム企画・実施、まちづくり研修会や地元農産物を「食」するイベントなど、地域資源を活用した地域活性に取り組むライフスタイルは若者や女性の活躍のモデルとして推奨すべきものと高く評価された。



第16回オーライ!ニッポン大賞受賞者 一覧

オーライ!ニッポン大賞グランプリ

- 1 和歌山県 田辺市
農業法人 株式会社 秋津野

オーライ!ニッポン大賞

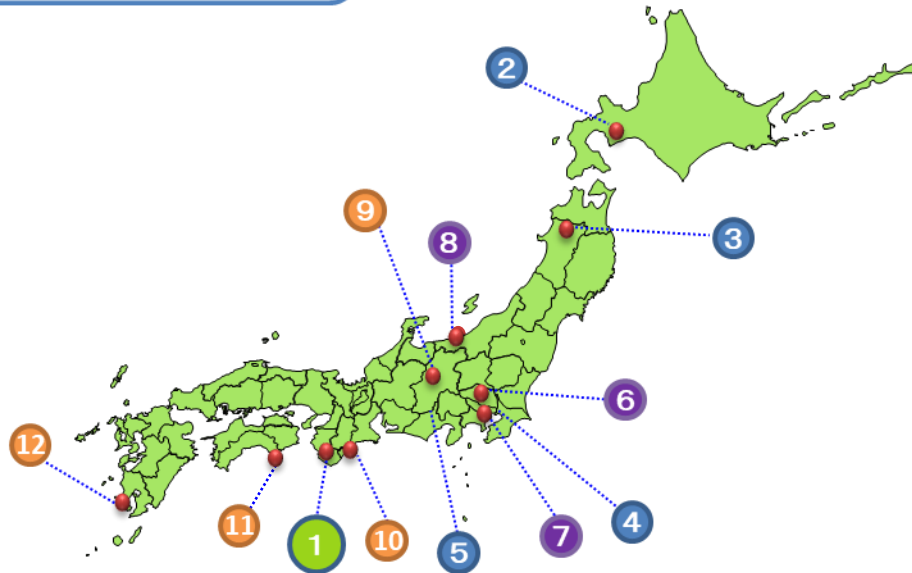
- 2 北海道 杜警町
特定非営利活動法人
有珠山周辺地域ジオパーク友の会
- 3 秋田県 大館市
大館市まるごと体験推進協議会
- 4 東京都 文京区
村おこしNPO法人ECOFF
- 5 長野県 泰阜村
特定非営利活動法人
グリーンウッド自然体験教育センター

オーライ!ニッポン大賞審査委員長賞

- 6 埼玉県 深谷市
ふかや緑の王国ボランティア
- 7 東京都 中央区
一般社団法人マツリズム
- 8 新潟県 上越市
月影の郷運営委員会

オーライ!ニッポン ライフスタイル賞

- 9 長野県 松本市
小峰 悦雄さん
- 10 三重県 熊野市
外園 淳一さん
- 11 高知県 室戸市
松尾 拓哉さん
- 12 鹿児島県 南九州市
瀬川 知香さん



オーライ!ニッポン会議 事務局

〒101-0042 東京都千代田区神田東松下町45番地 神田金子ビル5階

TEL03-4335-1985 FAX03-5256-5211 ホームページ <https://www.kouryu.or.jp/service/ohrai.html>

「オーライ!ニッポン会議」の事務局を構成する20団体

(公社)全日本郷土芸能協会 (一財)日本青年館 (公財)日本修学旅行協会 (公財)全国修学旅行研究協会 (公社)日本観光振興協会
(公社)日本青年会議所 日本商工会議所 全国商工会連合会 (一財)伝統的工芸品産業振興協会 (一財)地域開発研究所
(公財)日本離島センター (公財)都市計画協会 (一財)地域活性化センター (公財)育てる会 (公財)パブリックヘルスリサーチセンター
(公社)日本環境教育フォーラム 全国水士里ネット(全国土地改良事業団体連合会) 全国森林組合連合会 (一財)漁港漁場漁村総合研究所
(一財)都市農山漁村交流活性化機構